

旧知を訪ねて

藤田良雄

〈日本学士院 〒110 東京都台東区上野公園 7-32〉

1950年の9月18日、アメリカ・カリフォルニアのリック天文台の入口で台長シェーンさんに会ったのが、外国の天文学者と直接の交りを持った最初でそれ以来46年の歳月が流れた。その間アメリカ、カナダの天文台や大学で研究或は観測のため、2ヶ月、3ヶ月、半年、或は1年余同じ場所に滞在し、主として天文学者及びそれに関係のある人々と交流を深めることができた。

これらの人々との再会を思い、今年の8月5日成田を出発して各地を訪ね、不十分ではあったが何とか目的を果し、8月28日無事帰国した。

1950年の9月18日、私はアメリカ、カリフォルニア、マウント・ハミルトンの山頂（標高1283メートル）にあるカリフォルニア大学付属のリック天文台の入口でシェーン台長から声をかけられたのが外国の天文学者との最初の直接の交流であった。その時以来46年という半世紀に近い年月が流れた。その時は約1年1ヶ月の滞在で帰国したが、それ以来、観測研究のため或は客員教授として、2ヶ月、3ヶ月、半年と一つ場所にとどまって主に天文学者との直接の交りを持つことができた。勿論天文学にかかわりを持たない人々とも親しい縁を結ぶことができた。

今年の8月、私は現在たずさわっている仕事に支障はないと判断し、自分の年令のことも考え、知り合った人々との旧交を暖める旅に出ることを決心した。今まで外国への旅は先に述べた以外は会議、研究集会、特別な要務と、何らかの責任をもっていたが、今度は、その意味では全く自由な旅であった。今度は自分の年令のことも考え、次男の明雄に同行してもらうことにした。8月中は仕事に差し支えないという同意を得たからである。かくして、8月5日成田を出発し、同28日に帰国するまで約1ヶ月足らずの旅を無事終えることができた。以下その旅日記をしるしたいと思う。

8月5日、最初に飛行機から降り立った処はロスアンジェルス空港。ドン、スージーという夫婦が迎えに来て下さった。ロスアンジェルスから南に約70キロのミッション・ビエホという地区の家に直行し、3日間の滞在の拠点になったのである。先に述べたように1950年リック天文台に3ヶ月滞在した時、私は山頂の望遠鏡のドームのすぐ近くの宿舎に泊まっていた。そして三度三度の食事は宿舎の一部にある食堂でスタッフの皆さんと一緒にしていた。食堂の賄いはネビル、ミラーという姉妹が腕を振っており、その丁寧な料理は大へん好評であった。姉妹の夫々のご主人は天文台の建物や望遠鏡の管理をしていた。妹さんのミラー家の息子さんはその時未だ10才位の子供であったが、後に事業家となり日本にも度々来たりして私の一家との交りとなった。その息子というのが、ドンなのである。

ここでの私の目的はパサデナ、ロスアンジェルスから北の方に約70キロ、私の拠点からは約150キロ位。パサデナは1972年と1974年夫々3ヶ月、2ヶ月と滞在した処で、カリフォルニア工科大学（通称カル・テク）の所在地、ウイソン天文台（180吋反射望遠鏡）、パロマー天文台（200吋反射望遠鏡）を含めたハール天文台のオフィスがサンタ・バーバラ通りにあった。

8月6日早速ドンの運転でバサデナに向かう。ここには私の逢いたい天文学者ならぬ一家族が住んでいる。それはD. 山中さん。1972年初めてバサデナに滞在した時である。私はサンタ・バーバラ通りのオフィスに一部屋をいただいて、観測や実験で出掛ける時以外常に定刻に出勤し、又退出して、近くに定めた私の下宿から通っていた。オフィスに通い始めて間もない頃、2階建ての瀟洒なオフィスの前の広い芝生の上で芝の手入れをしている人を私は通りがかって認めた。その人が振り返ると私がそちらをみるのところが偶然一致し、その人を私は日本人であることを意識したし、先方も矢張同じだったのであろう。それ以来親しい友人となった。バサデナで庭師として何十年も働いている山中さんである。山中さんとはその時以来何回か会っているが、矢張再会は嬉しいものであった。暫く時を過ぎてからカル・テクに向う。この天文学教室は昔から多くの著名な天文学者が腰を落ちつけた処である。私は前後2回の滞在中、実験室のマイクロ・フォトメーターのお世話になった。

丁度東海大学の比田井昌英君がサージェントさんの世話で来ており、迎えて下さった。私はここではグリーンスタインさんに会いたいと思っていたのであった。特に1974年2回目にここに来た時、当時の台長バーコックさんから私に丁度大型のイメージ・チューブができたから、それを200吋望遠鏡に取りつけて微光星のスペクトルを撮影するといったという親切なお申し入れがあった。それに応じてグリーンスタインさんが何日か私と一緒にパロマーまで来て下さって、200吋望遠鏡のクーデ室の分光装置にイメージチューブを取り付け、2人で実験を繰り返した。ようやくセットできて観測可能となり、私は微光度(7等星)炭素星HD 137613(R3, C1₂型)の7700 Å ~ 8300 Å領域がはっきりと撮れたフィルムを撮影の翌日カル・テクのアセニウムでグリーンスタインさんに見せた時の同氏の満足そうな顔を今でも忘れることができない。しかし現実には厳しい。教室できくと、この頃は殆どお見えにならな

いという。

私は思いきって電話することにした。電話にすぐ出られた氏の声は1974年にお別れし1976年に一度お会いして以来初めてであったがサビのある同じ調子、しかし自分は余り元気なく、家内が大へん具合が悪いので殆んど外出せず、教室にも月1回位行けるかどうかというようなお話であった。私は恒星分光学の権威としてAstrophysical Journalで活躍された往時のことを思い暗然とした思いで電話でお別れしたのであった。

8月8日、ロスアンジェルス空港出発、シアトル経由でカナダ、バンクーバー島のプリティッシュ・コロンビア州の首都ビクトリアに着く。クライメンハガ父子が迎えて下さった。ここは1969年春から暮れまで約7ヶ月滞在した処である。ビクトリアの郊外にカナダ、ドミニオン天体物理天文台がある。クライメンハガさんの所属するビクトリア大学のユニバシティ・ハウジングという宿泊施設に泊めていただいた。1969年ここに来た時、丁度岡山の188センチ反射望遠鏡の計画が実り、岡山県鴨方の岡山天体物理観測所の建物ができ、望遠鏡の本体もイギリス、ニューキャッスルのグラブ・パーソンズ会社から送られて来た頃であった。私は幸にそれと殆んど同じサイズ(岡山が約2インチ口径が大きい)で半年観測ができるということで訓練にもなると思い、又マッケラーさんの招待もあってやって来たのであった。半年を越える滞在中私はビクトリア市内に下宿し毎日数キロ離れている天文台に通ったのである。当時ベトリさんが台長で、K・ライトさんや、女性のアンダーヒルさんが第一線の天体物理学者として活躍していた。お二人とも分光観測が主で、ライトさんは食連星、アンダーヒルさんは早期O型星のスペクトルの研究に余念がなかった。私の天文台行きは、ライトさんが市内から通勤しておられるので途中拾っていただくために殆んどバスなどを使う必要がなかった。

私たちを迎え宿舎を予め予約しても下さったクライメンハガさんは当時ビクトリア大学の天文学教



K. O. ライト夫妻とコンドミニアムのバルコニーにて

室に所属、私と同じく低温度星のスペクトル研究に従事、観測のため天文台に時々来られたので天文台の食堂でお会いしていた。1972年には3ヶ月の予定で日本に来られ岡山の天文台で暫く一所に観測した思い出もあり、永いつき合である。私の下宿先の近くで知り合い親しくなったウッド家の両親は既になくなったが、当時11歳だったティディ君にも今度の訪問では大へん世話になり、彼の車でライトさん夫妻を訪ねることができた。1976年ライトさんの退官記念コロキウムがビクトリアで開かれた時は私は招待され、先に述べたグリーンスタインさん、アンダーヒルさん等に再会したが、それからすでに20年過ぎているのである。ライトさんは夫人と共に一度はカリフォルニアのサン・ディエゴの近くに家を持たれ、寒い冬の季節にはそちらで暮らすという生活をされたが、現在は海岸に近いビクトリアのコンドミニアムの2階で毎日を過され、先年会った時はお元気だった夫人も大分弱られて、私たちの話も途切れがちであった。

連星のスペクトル観測で活躍したバツテンさんにも会えると思ったが、それができなくなり電話で言葉を交すにとどまった。電話では同氏が発展途上の東南アジアの国々の教育に関心があること、今年の京都のIAU総会には出席したいとのことつけ加えられた。只ビクトリア滞りで残念だったのはアンダーヒルさんと会えなかったことである。実は

前もって、彼女は現在バンクーバーに住みブリティッシュコロンビア大学の天文地球物理教室に在籍しているが、ビクトリアには親戚もあり是非会いたいのので私の都合のいい日を教えてほしいとの手紙をもらい、私もその日を連絡して楽しみをしていたのであった。しかしその前日、私の宿舎にお兄さんから電話があり、彼女は急にストロークで倒れ入院するはめになったから会えなくなったということで私も驚いた次第であった。私が帰国してから改めて彼女に、大へん残念だった、病気は如何と手紙を出したら折り返し返事があり、細かい字で次のようなロングレターが認めてあった。幸い軽微だったので退院できた。会えなくて残念だった。これからは自分の身体のことを考えながら早期O型星のスペクトル研究を続けたい。この秋にハワイのコナでワーク・ショップがあるので是非参加したいと彼女の勝ち気な研究意欲を示していた。私もホッとした思いである。

このようにして3日間のビクトリア滞在は過ぎ8月11日ティディの車でビクトリア空港まで送ってもらい、バンクーバー経由でオタワに向う。夕方着いてヘルツベルグ夫妻の出迎えを受けた。そして予約していただいていた“シャトー・ローリエ”ホテルに落ち着いた。ヘルツベルグさんは私の尊敬する学者の一人。物理化学の泰斗でノーベル賞の受賞者。星間分子の機構に興味を持たれている関係から天文学者との交流が深い。私も大分前から親しくしていただき、日本においでの際は時々お会いし、岡山の天体物理観測所にもお連れした。先年90才のお祝の会には私は出席できなかったが、学士院の外国客員であられることからお祝いの手紙をお送りしたことがあった。8月12日朝お二人で迎えに来られ、夫人のドライブで主宰しておられた国立のリサーチ・カウンシルの横を通り、以前にもお訪ねしたことのあるレークウエイ・ドライブのご自宅に入った。この頃少し足腰が弱くなったと杖をつけておられたが、元気に話された。先年なくなった森野米三君について残念だったと云われ、又チ

ヤンドラセカールさんの死も大へん惜しんでおられた。そして最近出版されたワリ氏著“チャンドラ”(チャンドラセカールさんの業績の詳しい伝記)を私に進呈するからと云ってサインをして下さった。チャンドラさんとはヘルツベルグさんが暫くシカゴ大学のヤーキス天文台におられた時、共に過ぎたのであった。明るい性格の夫人のイタリア料理を御馳走になり、午後3時又お二人の見送りをいただいでオタワ空港を後にしてワシントンD. C.に向かったのであった。

4時半ワシントン、ダラス空港に着く。ここでも会いたい人がある。ナンシー・ロマンさんである。私が最初にこの度の旅行について連絡した時、ワシントンで1日は是非自分の家に泊まってほしいとの手紙を受けたが、私は時間の都合で泊まることは難しいが飛行機を乗り換える際3時間位は余裕がある旨折り返し返事を出した。そうしたら彼女からすぐ返事があり、家から空港まで1時間位だから空港で会いましょうとのことであつた。

ナンシーは空港のロビーで待っていた。空港のレストランに入り、私の出発まで久しぶりの会話が續いたのである。

1950年の12月の末、私はリック天文台3ヶ月の滞在を終えて、東に移動、シカゴ大学付属ヤーキス天文台のあるシカゴから約70キロのウィリアムス・ベイという小さな町に移った。その頃ヤーキス天文台は最も充実した研究の場所で、ストレームグレン台長の下にカイパー、モルガン、チャンドラセカールといった天文学者が顔をならべ、ナンシーは講師としてスー・シュー・ファンや当時大学院学生として居住していたオスターブロックやリンバー等と共に若手の研究者として活躍していたのである。私もそれ等の人たちに加えてもらって、共に学び共に遊んだ覚えがある。ナンシーはヤーキスで大分研究を続けたが、その後、NASAに移り、NASAのボスとして有名になった。

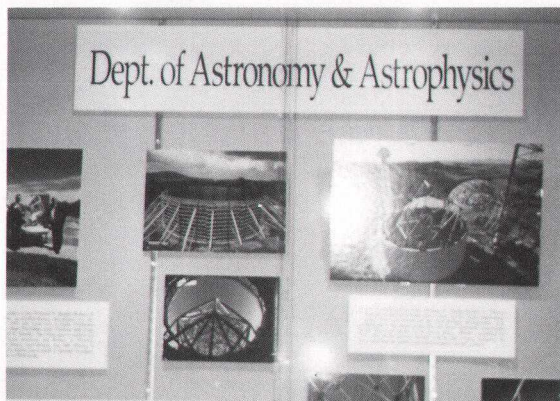
現在勿論第一線は退いているが、そのバイタリティは一向衰えず、連日色々のことで忙しいと言



ナンシー・ローマンさんと
(ワシントンD. C. ダレス空港にて)

っていた。恒星天文学の分野で *Astrophysical Journal* で活躍したことはよく知られていると思う。2時間程のリユニオンであったが私には充実感のあふれた時であった。ダレス空港でナンシーと別れてペンシルバニア州のステート・カレッジの小さな空港に着いたのは夜半12時を過ぎていた。ひっそりした夜、雨が降っていた。かねてルーさんに予約しておいていただいたあったホテル「デーズ・イン」にタクシーで向つた。

1971年の年初めから7ヶ月滞在した土地である。ペンシルバニア州立大学の天文学教室に勤務の松島訓教授から、こちらに一度来て講義してほしいとお誘いを受けたのは1969年彼が未だユタ大学にいた頃だったが、ユタから転任してようやくNSFの資金でOKとなったのが、1971年のペンシルバニア行きであった。私が客員教授として着任した時は電波天文学界でよく知られていたヘーゲンさんが教室主任で、滞在中はほんとうによくお世話になった。そのヘーゲンさんも松島君も亡くなり、転勤、移動などで現在私の知っている人は恒星天文学のアッシャーさん、原子分子基礎理論のサムソンさん、専門の違う経済学のルーさんだけである。翌日の朝、ルーさんに電話して着いたことを知らせると、安心した様子であった。早速迎えに来ていただき、懐かしい大学のキャンパ



ペンシルバニア州立大学天文学教室の掲示板



アッシャーさんとスタッフ
(大学構内ライオン像前にて)

スに入る。天文学教室は私のいた当時の建物ではなく、新しいデービー・ラボに移り、そこでほんとうに久しぶりにアッシャーさんとゆっくり話すことができた。サムソンさんは休暇をとり留守で会えなかった。1971年の滞在中、ショッピング、食事に利用していた通称ハブ（HUB）（ヘッチェル・ユニオンビル）も内部が新しくなっていた。又味の好いことで有名だったアイスクリームショップは昔の通り繁盛していたし、広いキャンパス内の芝生の上を波打って走り巡るリスも昔と変わらない姿だった。なお天文学教室で進行中のHET（ホビー・エバリー望遠鏡）計画というのはペンシルバニア州立大学、テキサス大学、スタンフォード大学、ドイツのミュンヘン、ゲッティンゲンにある二つの大学の協同計画になる光学望遠鏡で特に分光目的でテキサスのマクドナルド天文台で建設中とのことだった。

ステート・カレッジで4晩を過ぎてからマイアミを経由して南米サンパウロに向う。途中再びワシントンを経由したが天候不良のためワシントンに1日泊るといふハプニングもあり、サンパウロ空港のガレルリョスに着いたのは18日の早朝であった。

サンパウロ郊外のモランビイに眠っている私の母と弟の墓地、平板のメタルには夫々の名前と生れた年月日、死去した年月日が記されており、母の

没年は1971年私がペンシルバニアにいた年、弟は1990年であった。親戚の数名と共に暫く黙祷を捧げた。

サンパウロでは国立宇宙研究所（INPE）にスカリーゼ君を訪ねた。同君はサンパウロの大学を終えてから1969年東大の理学部天文学教室で修士の学位を得た人で、電波天文学を専攻、今や国立宇宙研では大事な役割を持つ研究者となっている。広い構内の研究施設や、近いうちにあげようとしている気球に搭載する観測装置など見る事ができた。又この研究所で20年以上も研究を続けておられる高橋さん（地球物理学特にエアグローの研究）にもお話を伺うことができた。

サンパウロに在住の経済界の有力者の集りの盛和会で“宇宙の姿”という題で1時間ばかりお話したことも今度の旅の思い出の一つである。

8月21日夕方サンパウロ・ガレルリョス空港を発ちロンドンに向った。22日朝ロンドンに着いた。A・ボクセンバークさんに迎えられ市内のホテル“スタキス”に一泊した。ボクセンバークさんはごく最近までグリニチ天文台長兼エジンバラ天文台長を務め、定年でケンブリッジ大学、天文学研究所の教授としてなお研究中の天文学者で王立協会の有力なメンバーでもある。日本にも来られ、国立天文台と学術協定を結ぶなど活躍されている天



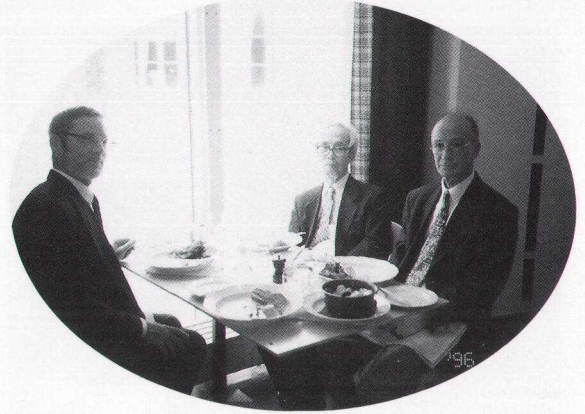
文学者である。

22日のお昼は夫人も見え、その日の夜までつき会っていただいた。

8月23日、今度の旅行の最後の目的地スウェーデンのストックホルム、アーランダ空港に着く。

ピアソン夫人と息子さんインゲマルが迎えに来て下さった。ピアソン夫人とは1951年以來の知己である。1950年私がアメリカに行き、西部から東部のウィリアムス・ベイに移ってヤーキス天文台に通っていた1951年の春、天文台に次のような電話があった。「私はスウェーデンから来ている者です。そのうちに日本へ行く予定です。今天文台に日本の方がおられるそうですが一寸紹介していただけませんか。日本のことが知りたいのです」と。このようなことがきっかけとなって私はピアソン一家と交渉を持つようになり、一家が日本に向け出発されるまで、私は観測や仕事で行けない日を除いて、5月から約2ヶ月、週2回位は訪問して言葉やその他につき助言した。そして私が帰国して、一家の居住した世田谷を訪ねて以来、日本滞在中の十年余、それから一家が帰国されても永い家族ぐるみの交わりは続いた。ご主人は1988年に亡くなったが、その絆は消えることがないであろう。一回毎の滞在期間としてはそう永くはないが十回以上も訪ねた外国の土地は私にとってストックホルム以外にはないのである。

ここにはもう一家族、私にとってストックホルム訪問の必然性を与える人々がいる。それはリンドブラードさん一家である。1954年私が初めてヨーロッパに旅行した時、スウェーデンのストックホルムで国際コロキウムに参加した。会場はサルチョーバーデンのストックホルム天文台、その時の台長はパーティル・リンドブラードさん、オランダのオールトさんと並んで銀河系の構造、特に銀河回転について解明した当時の天文学界の第一人者であった。今でもパーティルさんのおだやかな話しぶりや態度を忘れることが出来ない。その時は未だ駆け出しのといっっては失礼だが、若い天文学研



右がP. O.リンドブラードさん、左がノルデンスタムさん。
(博物館食堂にて)

究者だった息子さんペロロフがお父さんの後をついで、同じような銀河構造について電波領域から調べるといふ仕事を続けられており、すでに定年で退職されてはいるがサルチョーバーデンの天文台に居住し、研究を続けておられる。今度も私はその一家に暖かく迎えられた。

8月25日は1日ピアソン夫人やその親戚の皆さんとのつき合い、又御主人の墓参り等で時を過ぎたが26日はペロロフさんが迎えに来られ、先ず博物館に館長ノルデンスタムさんを訪ねた。ノルデンスタムさんは生物学者で日本にもなじみ深く、日本の国際花と緑の博覧会記念協会の主催するコスモス国際賞の役員として度々来日され、私もそれに関係していることから知り合うようになり、今度ストックホルムへ行った時はお訪ねすると約束していたのである。ペロロフさんと共に昼食を共にして歓談した。

博物館のすぐ近くにあるスウェーデン王立科学アカデミーに二人で出かける。勿論公式の表敬ではないが、ペロロフさんが前もって話しておかれたのか、院長フレグガ、幹事ヤコブソン、外事係タンベリ、秘書エドブラードの皆さんがおそろいで歓迎して下さいたのには驚きかつ恐縮した。スウェーデン王立科学アカデミーは数年前250周年記念式典を迎えたヨーロッパでも古いアカデミーである

が、フレッガさんは設立以来初めての女性院長の由である。丸いテーブルを囲んで茶菓の供応と共に話が弾んだ。それからリンドブラード夫妻と共に、お嬢さんご夫婦の新しく移られたばかりのお宅を訪ねた。ペロロフさんに伺うと、息子さんはもう一人前の天文学者として活躍され、結局、3代続きの天文家系になるようで、珍しく又喜ばしいことであると思った。29日の朝、私の私的な表敬であったのに拘らず、スウェーデン王立科学アカデミーはハイヤーを用意して下さって、アールランダ空港に到着、フランクフルト経由で成田着のJALで無事旅行を終えることができた。通算24日間のこの旅で半世紀近くにわたる知人との交流を改めて深い縁の絆にすることができたのはほんとうに幸いであった。この旅を通して、再会の喜び、再会がかえって私の心の痛みを導いたケース、更に幽明境を異にした友人にノスタルジアの思いを深くしたこともあり、センチメンタル・ジャーニーだったことは確かである。

なお今度の旅で会いたいと願しながら、日程の都合で如何ともし難くなったバイデルマン、キー

ナン、会うことになっていながら不慮の病気で会えなかったアンダーヒル、ワシントンD. C.に立ち寄る度に必ずお会いしていたが、2、3年前他界されたマーガレット・ムーア・シッターさん等の皆さんのことをを思う。元気であらう皆さんには、研究の更なる発展を祈り、幽明境を異にした方々にはご冥福を祈る次第である。なお私の今度の旅でいつも安心感を与えてくれた明雄に感謝する次第である。

Reunion with Old Friends

Yoshio FUJITA

The Japanese Academy

7-32 Ueno Park, Taitoku, Tokyo Japan

On 16th September, 1950, I met Dr. C. D. Shane in front of the Lick Observatory, University of California. It was my first contact with foreign astronomers. Since then, I stayed for my research work several times in the observatories of the United States and Canada and could make acquaintances of astronomers there. In my recent travel abroad from 5th August, 1996 through 28th I enjoyed the reunion with those old friends.